

## 第二次大戦下の賀川豊彦

野村 誠

### 序 賀川豊彦とウェスレー・メソジズム

第二次大戦中、時局によって変節する賀川豊彦の矛盾に満ちた言動をどう理解したらよいか、論議を呼ぶ。しかし賀川が、ウェスレー・メソジズム運動から影響を受けていることに異論はない。そこで、賀川を理解するために、先ず、ウェスレーとの関わりから見ていきたい。

賀川豊彦 (1888-1960) は、ウェスレー (John Wesley 1703-1791) の『ジョン・ウェスレー信仰日誌』<sup>1</sup>を20代の初めに読んだ。それは賀川にとって「最も深い感化を受けた書物の一つ」(『信仰日誌』序文)となり、約20年後の40歳の時(1929年)、これを翻訳出版している。この本は、主として黒田四郎が訳して賀川が監修し、共訳という形で出版している。このことから考えても、彼がいかに長期間、ウェスレーから感化され続けたかが分かる。

ウェスレーは、18世紀英国の産業革命時代に牧師として宗教復興運動を指導し、人々の魂と英国社会を、暴力革命に至る危機から救った。そして賀川は、ウェスレーが指導したメソジズム運動を手本として、日本の社会を救わなくてはならないと考えた(同、序文)。

実にウェスレーの運動は個人の魂を救うたのみならず、社会の組織を救

---

<sup>1</sup> ジョン・ウェスレー著、賀川豊彦・黒田四郎共訳『ジョン・ウェスレー信仰日誌』教文館、昭和4年、以後『信仰日誌』と略記する。

う力を持っていた。彼が宗教に対する熱愛と神学的決定論に反対して道徳的自由を高唱したことと、妥協なき規則的な生活と、愛と、精勤と、絶えざる祈は、彼の秀れたる経営的手腕と相俟って、近代英国の産業革命を宗教的に救う一つの力となった。（『信仰日誌』序文）

賀川は、ウェスレーが「個人の魂」ばかりでなく「社会の組織」をも救ったことと、そのことが「産業革命を宗教的に救う一つの力となった」ことを評価している。そこで、賀川は、18世紀英国で活躍したウェスレーを手本として、日本における産業革命の救済を考えた。賀川は、社会の問題を解決するためには、個人の魂の救いから始めなければならないということをウェスレーから学んでいる。

社会組織が人間の全部ではない。個人の精霊が高挙せられずして、社会の改造は不可能である。ウェスレーの執った道は、永久への道である。私は、彼の生涯を繰返し繰返し瞑想して、日本における産業革命が、同じ方法をもって救われねばならぬことを確信する。（『信仰日誌』序文）

賀川は、1929年2月、世界恐慌の直前に、約200年の時を超えてウェスレーについて学び、日本社会の救いの糸口をウェスレーの信仰とメソジズム運動の社会的活動に求めた。以上のように、賀川はウェスレーの信仰とメソジズム運動の精神を引き継いだ。

ウェスレーは、18世紀英国のキリスト教会と社会の不正、墮落を批判し、個人と社会の秩序回復、社会正義、平等、自由、相互扶助、社会連帯といった社会の改革に努めた。神への愛が、個人から社会へと広がり、社会の救いを通して、再び神へと至る<sup>2</sup>〈愛の循環〉がここに実現した。

そして、このメソジズム運動が19世紀英国に与えた影響について、阿部志郎は、チャーチスト運動、工場法、炭鉱法、農民組合、監獄改良などは、ウェ

---

<sup>2</sup> J.E. Rattenbury, *Wesley's Legacy to the World*, London : Epworth, 1928, pp. 120-124.

スレーなしには成し遂げられなかった<sup>3</sup>と述べている。

ウェスレーとメソジズム運動によって、産業革命期の英国は貧富の格差拡大による社会分裂の危機を克服したと、賀川は述べている。このことについてもより詳しく、賀川の著作からたどり、賀川の理解したメソジズム運動を考察し、賀川の社会運動の源を探求したい。賀川は『社会革命と精神革命』の中の「ウェスレーによる精神革命」の章で、メソジズム運動について次のように記述している。

唯物共産主義者は、天地に神はない、道徳などはどうでもよい、目的のためには手段を選ばなくてよいと主張する。しかしどうしても人格的に考え、道徳的でなければならない。そして社会革命の代わりに無血で革命をやる技術的にうまい方法はないものであろうか。それをイギリスは精神革命によって立派にやりとげてしまった。<sup>4</sup>

賀川は、まさに人格的、道徳的な「ウェスレーによる精神革命」が、「全英国を革命の危機より救うに至った」（『全集』4:269）と指摘している。マルクスが、資本主義の発達したイギリスに革命が起きることを予言し、それがはずれたことについて、賀川は、「それはイギリスにおいては、マルクスが馬鹿にしていた宗教運動が盛んだったためである」（同）とメソジズム運動がマルクスの予言を覆したと主張している。

そして、このイギリス社会を救ったウェスレーの精神は、組合運動の中で現在も尚、生きている。この点について、「協同組合の革新性」（『社会革命と精神革命』）の中で、賀川は次のように記述している。

ウェスレーたちは、聖書の真理を実行にうつし、助け合いの運動を真剣にやり出した。宗教を生まれた時と死んだ時だけのものとせず、生活全

---

<sup>3</sup> 阿部志郎著「ウェスレー信仰運動の意義」『青山学院新聞』、昭和26年6月15日。

<sup>4</sup> 『賀川豊彦全集』キリスト新聞社、1978年版4:268。以後『全集』と略記する。また引用に際して旧漢字を当用漢字に旧仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。

体を神様にささげるといふ誠の精神運動を起こした。政府の間にも、民間にも、労働組合の中にも、彼らは入って奉仕を続けた。イギリスでは、今日に至るまで労働組合の中に聖書研究会が開かれている。マルクスなどの指導原理と異なり、人道的な立場から精神主義的労働組合が組織されている。（『全集』4:269）

以上のように、賀川は、英国の労働組合が聖書研究会を催し、ウェスレーによる助け合いの精神を維持していることを評価している。賀川は、昭和2年『基督教社会主義論』の中で、ウェスレーの果たした役割を次のように述べている。

英国の産業革命に対して暴力なしの大改造を画したものは、まことにヘルンフットの兄弟愛運動に教えられたジョン・ウェスレーその人であった。近代になって、ロンドンの貧民窟に多大の貢献をなした救世軍のブース大將も、元はモラビヤの系統を引いたウェスレー主義者の一人であった。（『全集』10:258）

上記のように、ウェスレーの運動は英国の産業革命を暴力革命から救い、また救世軍の指導者にも影響を与えたと賀川は語っている。さらに賀川は、英国の労働組合や農民組合、そして労働党にもウェスレーの影響を確信している。

今日の英国における労働組合のごときは、今なお宗教的なることは、何人も認める所である。それらのあるものは、ウェスレーの弟子達によって創立せられたものである。英国において最初農民組合を設立したラレスはウェスレー派の説教者であった。労働党を作ったケヤ・ハーディ（1856-1915）は熱心な信者であった。（同）

賀川は、英国の社会運動家たちと同様に、自分もウェスレーに影響されて貧民窟に入り、労働組合を結成し、農民組合を創設したと言いたいのであろう。賀川が、メソジズムを個人ばかりでなく社会を救う宗教的社会運動の手本と見

なし、ウェスレーをその模範的指導者として仰ぎ見ながら活動していたと思われる。賀川豊彦が、18世紀英国で宗教復興を指導したジョン・ウェスレーから多くのことを学び影響を受けていることを、桑田秀延は次のように表現する。

大衆伝道と社会思想とは両立しないものだが、賀川の場合にはこれが統一されている。この点ウェスレーに似ている。賀川は神学者バルトよりも伝道者ウェスレーに近い。<sup>5</sup>

これまで見てきたように、賀川はウェスレーから多大な影響を受けてきたので、賀川が英国滞在中に、「ウェスレー博物館を見たい」と思ったのは当然である。賀川は、1925年4月にウェスレー博物館に立ち寄り、「ウェスレーの墓」と題する一文を残している。少し長くなるが以下に紹介する。

イギリスを去る前に、是非私はウェスレー博物館を見たかった。フランス革命の真最中、英国の宗教運動を指導し、英国を暴力の革命より救ったのは、全く、ジョン・ウェスレーのお陰であった。トマス・カーライルもそう言っている。私は長い貧民窟生活の中で、最も感化させられた書物の一つは、ウェスレーの伝道日誌であった。彼が、午前5時から、午後の10時まで、ほとんど超人的に労作し、数万ページの著作と、幾万里の馬上旅行によって、大英帝国の行詰まった精神界を、混沌たる状態より救い得たことはナポレオン以上の大事業であった。（『全集』23：90）

このように、賀川にとっては『ウェスレーの伝道日誌』もまた、「最も感化させられた書物の一つ」であった。賀川は20代初めに出会った『ジョン・ウェスレー信仰日誌』や貧民窟で繰り返し読んだ『ウェスレーの伝道日誌』に感化され、学び、励まされながら、社会運動を行い、労働組合を結成し、農民組合を

---

<sup>5</sup> 「賀川豊彦全集月報」2、第21巻添付、キリスト新聞社、昭和37年10月。

創設していったことに疑問の余地はない。

清水光雄は『民衆と歩んだウェスレー』<sup>6</sup>の中で、説教や聖餐式などによる魂の救いのみならず、肉体を含めた人間全体の救いを考え、実践したことをメソジスト運動の特徴ととらえた(同、p. 18)。また、そのメソジスト運動の指導者ウェスレーを称え、「1人1人の会員にキリスト教の基本を教え、この福音に即したこの世での生き方を全体的・総合的視点から導いたウェスレーこそ、民衆の神学者でした」と解説した(同、p. 222)。この清水の言葉を借りれば、賀川もまた、〈民衆と歩んだ神学者〉であり、絶えず民衆の生活向上と社会全体の救いの実現に努めてきた。

賀川の思想と実践は、神戸葺合新川のスラムで始まった。スラムでの彼の献身的な活動は有名だが、それは、「神の国の建設」という壮大な目標の入口であった。日米の貧困を調査・研究・分析して、貧困問題解決のための社会経済体制を模索し、「競争よりも相互扶助が有効」との信念に基づき、協同組合や労働組合の設立と育成に情熱を注いだ。そのほか、政治・経済・医療・教育などの広範囲の活動に熱心にかかわっていったが、関東大震災後は、新川のスラム以上に厳しい状況の被災地を社会福祉事業と伝道の拠点として、被災者の心と体を支える働きに邁進した。暴力を嫌い、常に、平和と正義のために尽力したが、皮肉にも、時代の流れの中で、意に反して大戦に巻き込まれ、微妙な立場に苦しんだ。だが、敗戦後の日本復興のための賀川の功績も少なくない。

どのような時代、どのような状況に遭っても、貧しい人に寄り添い、貧しい人の心と体の問題に耳を傾け、具体的なケアや指導を実践しつつ、同時に、その問題を生み出す社会全体の改革に取り組む賀川の姿勢は、言うまでもなく、「個人の魂ばかりでなく、社会の組織をも救った」ジョン・ウェスレーに倣ったものである。

## 1. 賀川と預言者エレミヤ

戦前の若い賀川豊彦に影響を与えた人物には、ウェスレーの外に預言者エレ

---

<sup>6</sup> 清水光雄著『民衆と歩んだウェスレー』、教文館、2013年。

ミヤがいると思われる。

賀川は25歳(大正2年1913年)の時に、2冊目の著書として『預言者エレミヤ』<sup>7</sup>を出版している。新川の貧民窟に賀川が入って4年目のことであった。

エレミヤはイスラエルの民への神の罰を預言せねばならず、預言者の使命の不可能性で悩んだ。エレミヤは自己の内的苦悩と引き換えに、神の預言を民に伝えた苦難の預言者であった。賀川もまた軍国主義の世の中であって、反戦思想を表明することに苦悶し、人民の意に沿わない預言をしなしなければならなかったエレミヤに深い共感を覚えたと思われる。軍国主義帝国主義の中で、賀川は、「神の外、何者も恐れなかったエレミヤの様な人は今日我国にも必要な人物であります」(『預言者エレミヤ』20:319)と語って、自身を預言者エレミヤに重ねている。

旧約聖書における「エレミヤ書」とは、預言者エレミヤの言葉を弟子たちが歳月をかけて編集したものである。エレミヤはBC627年南ユダで預言活動をはじめた。当時アッシリアが滅び、新バビロニアが台頭したが、ユダ王国はエジプトと新バビロニアの間に挟まれており、両国の勢力争いに巻き込まれていた。ユダ王国では偶像崇拜がはやり、バアルに赤ちゃんや人を犠牲にささげていた(エレミヤ11:17)。エレミヤは神から離反したユダ王国の滅亡を預言したがために、迫害され、投獄された。BC587年ユダの首都エルサレムは包囲され、民はバビロニアに捕囚として連れ去られた(BC597, 586-538)。

「エレミヤ書」は、イスラエルの民が神に罪をゆるされてバビロン捕囚から解放される希望をも語っている。神は、墮落したイスラエルの民を懲らしめ、罪を認めさせ、主に立ちかえることを望んだのであって、決して滅亡を望んだのではない。

泣きやむがよい。

目から涙をぬぐいなさい。

あなたの苦しみは報いられる、と主は言われる

息子たちは敵の国から帰ってくる。(エレミヤ31:16)

---

<sup>7</sup> 『全集』20: pp. 284-319。

そして、BC537年、イスラエルの民は、ペルシャ王クロスによって、エルサレムに帰還することを許された。

軍国主義にあっても反戦思想を貫くだろうと思われていた賀川が、その期待に反して、国家の帝国主義的膨張政策に加担したかと思われる言動を見せた時、その矛盾に我々は悩まされる。けれども、戒能信生(東駒形教会)牧師は、「関東大震災の後に起こったこと」<sup>8</sup>の中で、「1923年の関東大震災から1931年の満州事変の開始まで、わずか八年しかないと言う事実に!」注目して、賀川に理解を示す。なぜなら、関東大震災の後、賀川が手掛けた東京の復興事業の宿泊施設の宿泊者の多くは、昭和の不況期、世界恐慌の中で失職し、満州開拓民として満州に送り出されていたという事実があるからである。すなわち、大震災後の多くの失業者を救うために、満州事変や日中戦争へ加担していったとも考えられる。歴史の「流れの中に満州基督教開拓団を企画・推進した賀川もまたいた」と戒能信生は解説する(同、p.1)。非暴力、平和主義のはずの賀川は、時局によって変節し、そのことが賀川という一人の人物の思想として検証した時、一貫性のない「矛盾」として批評されてきた。

昭和15年8月25日、賀川は説教「エレミヤ哀歌に学ぶ」<sup>9</sup>によって憲兵隊に検挙された。エレミヤ哀歌は、ユダヤ国家滅亡を前に歌った悲哀の歌であるため、検挙の材料となったと思われる。太平洋戦争直前の昭和16年8月26日、東京渋谷憲兵隊の監房に投獄されて3日間、日本亡国を予感して泣き続けたと言う賀川であるが、心中は、はたして戦争反対であったのか賛成であったのか、よく分からない。

## 2. 賀川と八紘一宇

シルジェンによれば、賀川の矛盾が表面化したのは、1938年の賀川の満州

---

<sup>8</sup> 戒能信生著「巻頭言」『賀川豊彦研究 第60号』2013年8月11日。

<sup>9</sup> 「雲の柱」昭和15年10月号、終刊号『全集』24:399。

講演旅行中、南満州鉄道総裁松岡洋介と初めて会った時だと思われる<sup>10</sup>。松岡は、「1933(昭和8)年、日本代表団の国際連盟脱退を主導した戦争推進派の官僚」で、「賀川とは著しく違う理想を持った政治家だった」(同)。にもかかわらず、大陸侵略は「アジア大陸を保護し発展させていく、日本の神聖なる役割」だと言う松岡の口実にだまされたのだと、シルジェンは迎合しやすい賀川を批判する(同)。

戦前の賀川は、我々に、実に力強い印象を与えてくれた。スラムにおける献身的な慈善活動もさることながら、戦争や貧困の原因を軽減するために新たな経済の仕組みを考え出し、愛と社会正義の実現の為に世界中を飛び回っていた。ところが、戦時中の賀川は、それとは対照的に弱々しく頼りない。国際主義と非暴力を捨てないまでも、日本の大陸侵略に対して、きっぱりと拒否することもできなかった(同、p. 277)。

優柔不断な賀川は、公然と戦争反対の表明をすることは避けたものの、その平和主義的背景ゆえに、憲兵隊の監視と尋問から逃れることもできず、何度も逮捕の憂き目にあった。その間の賀川の言動やそこから推測できる彼の心の動きについて、シルジェンは、米国の報道を丹念に調べ、海外からの視点で、鋭く、複眼的に洞察している。

暴力をひどく嫌っていたにもかかわらず、素朴な愛国主義者、賀川は、軍国主義化していく時代の流れの中で、矛盾した言動を繰り返していた訳だが、ついに平和主義を放棄し、日本政府に協力して欧米諸国に対するあからさまな敵意と侮蔑の言葉を吐く日がやってきた。1943年、賀川は、「『国際戦争反対者同盟』と『友和会』という、二つの平和主義団体から脱退している。」(同、p. 282)。

---

<sup>10</sup> ロバート・シルジェン、賀川豊彦記念松沢資料館監訳『賀川豊彦—愛と社会正義を追い求めた生涯』、新教出版、2007年、pp. 253-254。以後、シルジェンと略記この本について説明すると、1988年に米国でロバート・シルジェンが出版した Robert Schildgen, *Toyohiko Kagawa: Apostle of Love and Social Justice*, Centenary Books の翻訳である。

イタリア降伏とアッツ島陥落のあった1943年の5月に発表した「天空と黒土を縫合させて」は、賀川の愛国主義と戦争加担の序文である。「ルーズベルトの国民のみが、自由を持ち、アジアの民族のみが奴隷にならねばならぬと云ふ不思議なる論理に、太陽も嘲ふ」とアジアの白人支配への怒りを爆発させ、「太平洋の水は、永遠に青く残されたものを、アジアを保護国の如く考へたチャチルとルーズベルトは、遂に血をもって、太平洋を永遠に赤く染めた」と、反西欧感情をむき出しにした(『全集』20:129)。その翌年、基督教新聞(昭和19年10月4日号)では、「米国滅亡の予言」と題して、さらに厳しい口調で、米国を糾弾した:「禍なる哉アメリカ!『白く塗らるる墓の如し』と云ふ言葉はアメリカの為に造られた言葉だ!口は平等を唱えて、他民族を圧迫し、言葉に自由を弄して、自己のみの優越性を維持せんとするその放縦性を全能者は許し給わないであろう」(『全集』24:412)。

「神の国の同胞」であり「キリストにある兄弟」でもある欧米諸国を敵にまわして糾弾し、愛国精神を前面に出した賀川であったが、それでも、「彼は、自国の政府から気に入られてはいなかった」(同、p.280)。賀川が申請したパスポートは、軍部によって交付を拒否され、フィリピン旅行も実現不可能となった。「彼は、日本の軍国主義と帝国主義とを非難したことが以前にあった」ことと、「もし賀川がフィリピンに赴き、日本軍が犯した残虐行為の跡の数々を目撃すれば、大東亜共栄圏の大構想を非難するかもしれない、という心配が、当局にあった」という理由による(同、p.280)。このような状況で、日本兵の残虐行為を知る術もなかった賀川は、いよいよ「西欧の人種差別と植民地野心」に対する軽蔑的な発言を繰り返すようになり、1945年3月10日の東京大空襲では、それが頂点に達した(同、pp.276-287)。

白欧優越主義に対する非難の言葉は、「日本政府のための宣伝放送」にも利用され、英語放送もされた(シルジェン、pp.278-9)。だが、日本政府のおもわくだけではなく、賀川自身にも、米国の残虐行為と人種差別主義や帝国主義に対する抗議の気持ちは、相当に強いものがあったと思われる。戦時中の日本兵による残虐行為について少しでも知っていれば状況は変わっていたかもしれないが、知らない以上、欧米諸国に対する憤怒と侮蔑は相当なものであったに違いない。だが、賀川の憤激は、「根本的には非暴力者である人の叫びであり」、

「自らもその共謀者であることに気付いている」苦悩に満ちた、複雑な感情であった(同 p.287)。

敗戦の一か月前、東京九段の憲兵司令部で、賀川が語った懺悔の言葉は重い：「私は連合軍と戦争することが間違であるとは思ったが、東洋を占領する諸外国に罪があるとも思った。私は涙壺を用意して、日本の罪、列国の罪、そして人類の神への反逆の罪を『ざんげ』せねばならぬと思っていた。キリストを十字架につけている者は、二十世紀にも地球上に多く残っていると、私は悲しんでいる」(昭和33年12月6日号キリスト新聞「涙壺のささげもの」『全集』24:533)。

戦前、平和を愛する国際人として世界に知られ、また、尊敬された賀川が、戦時中、欧米諸国を敵に回して、容赦ない辛辣な暴言を吐くようになるということを、一体誰が想像したであろう？ 戦争が、非暴力主義者、賀川を野蛮人に変えた訳ではない。「賀川によれば、この戦争は、アジアが西欧のくびきから自らを解放するための戦いであり、日本は、自らの生存そのものが危機に瀕していたために、闘い続ける以外に道がなかったのである」(同、p.287)とシルジェンは解説する。

賀川の変貌、及び、国際主義の放棄は、[西欧]対[アジア]を[キリスト教国]対[非キリスト教国]として見るのではなく、[西欧資本主義の征服者]対[アジアの持たざる者]として見る時に理解できる。賀川は、「西欧のどん欲と人種差別主義からアジアを救うと言う日本の聖なる使命」こそ、「キリスト教の大義」であると判断した(同、pp.283-6)。

シルジェンは、「根本的には非暴力者である」賀川の、西欧の人種差別と植民地的野心に対する強い怒りについて、深い理解を示している。

### 3. 戦後の賀川

戦後、東京においては、米国の強い主導権掌握の下で、極東軍事裁判(1946年5月3日-48年11月12日)が開廷された。これによって、戦前の軍国主義日本は、連合軍による外からの一方的な戦犯裁判を受ける立場となり、徹底的

な批判と非難を浴び続けることとなった。

この極東国際軍事裁判において注目すべきは、インドのパール判事存在である。パール判事は、「判事団の中でまったく特異な立場にあった」<sup>11</sup>。彼は、「長年にわたるヨーロッパのアジアへの植民地支配に心からの憤りをもち」、「戦時中は、日本とともに英国と戦ったインド国民軍にも関与した」という（同）。「彼の思想的立場は、日本と結んでインド国民軍を率い、インド独立を達成しようとしたチャンドラ・ボースに近かった」（同）。判決では負けたが、日本の無罪を主張し、白人の優越主義に挑んだ日本に共鳴し、ヨーロッパのアジアへの植民地支配とアメリカの原爆投下を非難した判事もいたと言う歴史的事実は、重大である（同）。パール判事は、極東国際軍事裁判が、裁判自体が連合国側の立場で、最初から日本を侵略国と決めつけていることに疑義を呈した。欧米諸国がかつてアジアに対して行った植民地化こそが侵略であり、日本の帝国主義への歩みを西洋列強が非難する資格はないと論じた<sup>12</sup>。

さて、賀川は、極東軍事裁判直後の1979年2月15日に、東京の一燈書房から、『東洋思想の再吟味』<sup>13</sup>を出版している。この本は、「中国を源とする日本の宗教文化」と「インドを源とする日本の宗教文化」を、賀川自身が東洋の聖典に挑みつつ、独自の視点から探究した日本の思想研究である。戦前、比類なき国際人として西欧に学び、西欧で講演し、西欧で認められてきた賀川が、戦後なぜ、あえて東洋の思想を再吟味したのであろうか？

賀川は『東洋思想の再吟味』の中で、インドの独立を非常に高く評価し、ガンジーを繰り返し称えている。戦前の西欧の植民地支配からの独立は、太平洋戦争のもたらした数少ない功績だからであり、また、有史以来最も奇跡的な、暴力によらない大革命が東洋で起きたことで、貪欲で野蛮な西欧に対する優越感を味わえたからであろう。「真理は既に世界に於て勝利を得つつある。西欧に於て然らざるも、東洋に於ては少くとも然りである」（『全集』13:132）と、この本を執筆した時の賀川の帰属性は明らかに東洋にあった。

---

<sup>11</sup> 岩波講座『日本通史』、第19巻、pp.171-194、極東軍事裁判/パール判事。  
[www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~tamura/tokyosaibann.htm](http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~tamura/tokyosaibann.htm)

<sup>12</sup> 中島岳志著『パール判事』、白水社、2007、p.157。

<sup>13</sup> 賀川豊彦著『東洋思想の再吟味』、一燈書房、1949年。

戦前、「おそらく世界で最も有名かつ尊敬された日本人」(シルジェン、p. 15) 賀川は、まぎれもなく、国際人であったが、戦時中、祖国日本に降りかかりつつある危機を目の当たりにすることによって、ついに、その国際主義を放棄した。「日本が米国空軍による大量爆撃のひっきりなしの猛爆を浴びた時」(同、p. 290)、動転した賀川が、「インターナショナルなキリスト教からナショナルなキリスト教に」(同) 傾いていったように、西欧思想から東洋思想に、微妙に、その自身の機軸を移動させていったように思われる。

賀川が、『東洋思想の再吟味』を、アジアの視点から執筆したことは明らかである。徹底的に批判を浴びる極東軍事裁判の成り行きを垣間見ながら、戦前の八紘一字の一翼を担った賀川は、この本を通して、自身の弁明と自己主張をしたかったのではあるまいか？ 西欧からではなく、アジア人として、パール判事と同じ土俵に立って、太平洋戦争を再考したかったのではあるまいか？ 暴力によらない独立を勝ち取ったガンジーに共感し、賀川に味方してくれそうな東洋の思想に自らを投じ、そこに、敗戦の痛手から立ち直す手掛りを見出そうとしていたように思われる。賀川にとっては、唯一残された自己弁明の機会が執筆活動であったから、並々ならぬエネルギーを投入したと思われる。

平和な時代は愛国心強き国際人として存分に活躍できたのに、戦争によって、一気に矛盾の中に突き落とされ、「二つの葛藤する価値、即ち、非暴力と内外の帝国主義との戦いとの間で、罣にかかったように身動きできなかった」(同、p. 359) 賀川が、再び、ペンの世界で、本来の活気を取り戻していく姿に出会うことができる。

『東洋思想の再吟味』の中では、いくつかの古代インドの聖典が紹介される。その中の一つ、「マハバラータ」は、ホーマーの「イリアッド」に比すべき戦争文学で、「インドの古事記」ともいうべき大叙事詩である。その中の有名な劇詩「バガバッド・ギータ」に登場する、弓の名人「アルジュナ」はあたかも戦時中の賀川を代弁するように、「戦争に臨んで煩悶する」無抵抗主義の義人であった(同、pp. 103-4)。この東洋の古典は、ガンジーの生き方にも大きな影響を与えており、読者に賀川とガンジーとの類似点をも連想させる。かつて、「日本のガンジー」と称されたこともある賀川であるが、「大二次大戦後、賀川の名声はガンジーのごとき世界的な名声を失い、小さくなっていた」(同、p.

358)。それでも、同じ東洋人として、誇り高きガンジーとの類似性を発見できることは、賀川にとっても、自信回復の助けになったと思われる。

敗戦から立ち直るためには、悔い改めも不可欠であった。「西欧の帝国主義の悪がどんなものであれ、アメリカの爆撃がどんなに恐ろしいものであれ、日本人は自分たちの領土的野心や戦争犯罪を認めざるを得なかった」(同、p. 311)ということも、賀川は十分認識していた。「日本の戦争責任と悔い改めの必要性を認めた」賀川は、戦後、全身全霊で日本の再建に取り組むことになるのだが、最も注目すべきは、「日本人が敵国の祝福と援助で再建を成し遂げたということ」である(同、pp. 295-8)。

戦後最初の首相、東久邇総彦は、賀川に「キリスト教的視野から国の改革を助ける」為に、内閣顧問になるよう依頼した(同、p. 301)。東久邇は、日本が蘇る為には、「敵を赦せ」と教えたイエス・キリストの倫理のごとき基準が、国民の心に注ぎこまれることが大切だと考えたからである。首相は日本を救うために「西欧に幅広い人脈を持つキリスト教徒」の賀川に協力を依頼したが(同、pp. 301-3)、賀川の考える「日本のキリスト教化」は、「必ずしもアメリカ化あるいは西欧化を意味しな」かったことは興味深い(同、p. 264)。

「賀川のキリスト教は、全く彼独自のものであり、日本に奉仕するために採用されていた」(同、p. 362)と、西欧人のシルジェンは、賀川が見出した東洋的キリスト教を評価して解説する。つまり、敗戦の苦汁をなめた賀川が求め、主張するキリスト教は、「キリスト教国家が世界支配を偽善的に求めるのに用いた、征服の道具としてのキリスト教」ではなく、「解放のための道具」であった(同)。

シルジェンによれば、1935年にすでに賀川らは「アジアが西欧の持っていないものを持っていることを見出した」と見抜いた人がいた。鶴見祐介である。鶴見は続ける。「アジアは西欧人が自ら作り出したと考えているものをより深くまたより純粋な形で保持していないだろうか。キリスト教についてはどうだろうか。西欧が二千年間も守ってきたと考えるこのキリスト教、その純粋な精神は彼らの心の中で悪化しているのだが、この宗教はむしろその生まれ故郷の東洋に復活の場を見いだしていないだろうか。」と(同、p. 363)。

これらのシルジェンの解説を丹念に読む時、賀川は、太平洋戦争では敗戦し

だが、東洋と西洋との文化的攻防では、決して負けていないのではないかとさえ思われる。一見、非暴力主義を放棄して日本の大陸侵略に加担したようにも見えなくはないが、賀川が抵抗し、戦おうとしていた相手は、世界支配をもくろむ偽善的野心であった。たとえ、その軍事的戦いには敗れても、東洋的文化が根絶やしにされた訳ではない。否、むしろ、東洋的文化の価値の再発見の機会となり、開放の道具としての東洋的キリスト教の種は、痛みと苦悩の中で、地に蒔かれたのかもしれない。

西欧における賀川やガンジーへの熱烈な崇拜は、「優越性の夢から覚めた白色人種のうめき声」であり、「真のキリスト教」の精神は、「既存の教会の空虚な勧め」よりも、むしろ、東洋的文化、あるいは、「非暴力手段で達成できる」社会改革の中にある(同、pp. 362-3)とするならば、「賀川はいまなお想起され、学ばれ、模範とされるに値する」(同、p. 366)。

## 結論 賀川に学ぶ「キリスト教伝道の今後」

敗戦後、東久邇稔彦に後押しされた賀川は、戦争によって押しつぶされていた活気を取り戻して「演説をし、政治家に助言を行い、協力の福音を説き、悔い改めを国に促し、日本のことを国際社会に説明した。」(同、p. 310)。そして彼は全身全霊を込めて日本人の戦争から平和への方向転換を手助けした。しかも「かつての敵国は、心底必要としている援助の手を差し伸べ、励まし、さらに全面的改革を求めた」ので、日本は驚くべき再建を果たすことができた(同、p. 295)。

「東久邇稔彦は陸軍中将石原完爾の強い勧めで賀川を参与に任命したが」、その理由は「福祉や援助活動に多くの経験がある人物から得られる実際的助言」に加え、「賀川的世界的なイメージ」にあった(同、p. 302)。「西欧に幅広い人脈を持つキリスト教徒の日本人を任命することは、日本がアメリカと協力したいと言う強力な意図の合図であった」(同)。そして、その役割を十分に認識していた賀川は、占領軍当局から「日本に対する好意的な取り扱いを得るためにその影響力を行使した」(同、p. 305)。「東久邇稔彦に任命されてすぐ、彼は占

領軍司令部に出向いてマッカーサーの参謀に会い、食料と空襲によって破壊された住居を冬が来る前に立て直すための木材を要請した(同、p. 308)「占領軍当局と彼が良い関係にある」ことは、全国紙に取り上げられ、そのことは多くの日本人を安心させ、賀川の仕事にも役立った(同)。外国の新聞もまた、しばしば賀川の活躍を取り上げ、「賀川は、その名声、援助活動の経験、組織能力などに利用価値を認める様々な集団とかかわることになった」(同、p. 310)。しかし、その評価は、大戦中の賀川の言動への批判もあって、まちまちで、なかには事実と異なる、かなり不当なものもあった(同、pp. 308-18)。けれども、世の中の評価とは無関係に、賀川は平和を積極的に推進するために、「キリストから与えられた仕事が終わるまで歩き続けねばならない」と、活動を続けた(同、p. 318)。賀川は、「キリストのための放浪者」として講演旅行に励み、軍国主義を植え付けるために使われた教科書の改訂に関わり、女性の権利の唱道者を手助けし、雑誌に平和主義や世界連邦についての彼の考えを執筆するなど、多方面で活躍した(同、pp. 318-20)。そして、1946年11月に「政策の手段としての戦争を絶対的に否定する九条を持つ新日本憲法が承認されてから」の賀川は日本人としての誇りを取り戻し、「この条項が国を戦争の苦痛から解放するだけでなく、戦争の社会的経済的重荷をも取り除いてくれる」と大いに喜び、勢いづいた(同、p. 320)。「作家、説教者、政治顧問、社会福祉家、行動主義者として」賀川は生まれ変わり、再び海外でも熱弁をふるうようになる。賀川の講演のテーマは、従来の「社会的正義、協同組合経済、償いの愛の力、キリスト教の応用的実践の必要性」に「日本での宣教活動への感謝と援助の訴え」が追加され、さらに「日本の平和憲法の革命的性質と、世界連邦主義綱領に基づいた新世界秩序の必要性」が強調されるようになった(同、pp. 320-24)。賀川の名声はキリスト教会に限らず「戦争と貧困の地獄から人類を引き出すこと」を願う広範囲の人に及んだ。「世界平和」こそが、賀川の最大の関心事であり、彼は「平和的な世界秩序を打ち立てるための運動に」邁進した。「その平和的世界秩序とは国際的な協調から生まれる経済体制の上に築かれ、賀川の信仰の核心にある愛によって命を吹きこまれたものであった」(同、pp. 326-7)。

今日の日本におけるキリスト教伝道は、不振を叫ばれて久しいが、隅谷三喜男は日本の教会は、もっと賀川に学ばねばならないと、次のように語る：「賀

川は日本のキリスト教会では受け入れられなかつた。だが、時代の制約から生じる彼の表現形式に拘泥せずに、彼が全人格を投げ出して告白しようとした信仰に立ちいってみれば、日本のキリスト教がかれから学ばねばならないことは、少なくない。教会は彼のあとにしたがって、世俗の世界で泥まみれになり、この世の十字架を負わねばならないであろう」<sup>14</sup>。

加山久夫は、賀川の「思想と実践は大抵社会改良のためであり、特に、社会的弱者の人間性の回復と解放を目的としたものであった」と解説する<sup>15</sup>。

賀川の思想と実践は、言うまでもなく、新川のスラムで始まった。賀川にとって、「イエスの宗教は単なる信条や教義でなく、それは命である」(シルジェン、p. 324)。それ故、彼は、生活から遊離した哲学も死んだ教義も形骸化された念仏も形式的な礼拝も侮蔑する。「いのちの泉」が湧き出る宗教でなければ、「赦し」も「再生」も有り得ないからである。

賀川は、「日本のキリスト者が、安楽に生活し、教理上の論争にふけりながら信者に説教するよりは、庶民の中でもっと労するように勤めていた」(同、p. 342)。賀川が、多くのキリスト者に欠けていると思った点は、社会的弱者に対する献身的態度であり、これは、隅谷三喜男の言う、「世俗の世界で泥まみれになり、この世の十字架を負わねばならない」ということと同じであろう。「イエスの救いは単に個人だけのものではなく、家族、人生、社会、それに人類全体に向けられている。」(同、p. 324)。だからこそ、「神の国」建設に向かって、「キリストの愛」を実践する「犠牲」が求められている。賀川は、「初代キリスト教に存在した愛と相互扶助とが世界的なものになり、諸国間の絶え間ない確執に取って代わることを望んでいた」(同、p. 339)。

賀川にとっては、「信仰は行動によって具体化されるべき」ものである(同、

<sup>14</sup> 隅谷三喜男著『賀川豊彦』日本基督教団出版局、1972年、p.197。

<sup>15</sup> 賀川豊彦記念松沢資料館館長・明治学院大学名誉教授「賀川豊彦の宗教思想と友愛」2009年5月17日 キャンパスイノベーションセンター東京・国際会議室「公共の神学と賀川豊彦」(「賀川豊彦記念・松沢資料館ニュース」No. 54、2002年6月、1-2頁参照。「境界線上の思想と実践」(『雲の柱』17号、2003年3月、賀川豊彦記念 松沢資料館) 22-23頁参照。)

p. 362)。だから、「貧困やさまざまな差別のゆえに社会の底辺に追いやられている人々の解放と人間性の回復」の為に、「実にさまざまな社会改良のプログラムを果敢に展開していった」(同、pp. 373-4)。しかも、賀川の視野は、常にとつともなく広い。「広い自然科学の知識、鋭い社会的な関心、そして深い宗教的な精神」<sup>16</sup>は、絶えず多くの聴衆を圧倒し、引きつけた。キリスト教を語るにしても、まわりの宗教を含めて、自分で、その歴史や聖典を学んでいるため、言葉に迫力があつた。

大江健三郎は、「世界の文明は単一なものではなく、アングロサクソンの文明だけではなく、周辺(マージナル)の文明があつて、初めて文明というもの成り立つのだ。・・・この点では賀川豊彦は正しかった」と、早くから多民族の文明に注目した賀川を高く評価する<sup>17</sup>。経済がグローバル化し、発展途上国と先進国の利害がしばしば対立し、地球の荒廃も核の脅威もいよいよ深刻化する今日、強者にとつとも弱者にとつともキリストの贖罪愛が「世の光」であると気づくなら、世界の歩みは変わるであろう。だが、我々一人一人の、教会の、そして国家間の、泥まみれの労苦なくして、キリストの愛を世に輝かせることは不可能なのかもしれない。

古屋安雄は「賀川が日本の教会で評価されなかったことと、日本の教会の伝道の不振との間に、深い関係がある」と指摘する<sup>18</sup>。古屋は「救われたものがどう生きるか、というキリスト教倫理、特に社会倫理はあまり語られない」(同、p. 96)日本の教会を「『塩気』のない教会」(同)と表現して、「病人を介護し、喧嘩を仲裁し、空腹の人々に食物を運ん」だ賀川の福音伝道と対比させている(同、p. 98)。賀川言葉は鋭い。「『キリスト教徒よ、諸氏は膨大なる費用をかけて堂々たる教会を建てて、飼ひ葉桶に生まれ、他人の墓に葬られたお方の後に従おうとしないことを恥じないのか』」(同、p. 99)。

賀川が評価されないのは、もしかしたら、賀川の言動が、あまりにも厳しい

---

<sup>16</sup> 古屋安雄著『日本のキリスト教』、教文館、2003年、p.174。

<sup>17</sup> 賀川豊彦記念講座委員会編『賀川豊彦から見た現代』、教文館、1999年、p. 95。

<sup>18</sup> 古屋安雄著『なぜ日本にキリスト教は広まらないのか』、教文館、2009年、p. 93。

からかもしれない。キリストの十字架は血まみれであった。苦しい十字架を背負わない限り、光り輝く十字架も、手の届かないはるか彼方に仰ぎ見ることしかできないのかもしれない。

賀川の時代以上に地球の荒廃が進み、核の脅威もいよいよ深刻化する今日、神の愛が支配する世の中とは、一体どういうものなのか、どうしたら近づけるのか、思い描くことすら難しい。賀川のような「課題に対して新しいアイデアを紡ぎだすことが大好きな、幻を見る人」(シルジェン、p. 318)がもし生きていたなら、現代のわれわれが抱える様々な国際問題や経済問題、あるいは地球の問題について、いったいどんなアイデアを出してくれるのか、聞いてみたい。賀川が「協同組合国際貿易を提唱し、諸国家の経済的協力によって世界平和を実現しようと念願していたことは多くの人が指摘するところである」(古屋、2009年、pp. 110-111)が、その方法は国内外の貧富の差がいよいよ広がり、テロリストの活動が盛んな現代世界においても、なお、有効なのであるか？ どうしたら、協同組合に基づく国際貿易を実現できるのだろうか？

賀川が「世界平和の為に世界経済を重視していることは正しい」(同、p. 121)と古屋も評価しているが、世界や地球が抱える今日的課題を無視して、伝道の成功はありえない。

ウェスレー・メソジズムが約200年前に、この世の悪と戦い、争いを鎮め、病人を癒し、貧困者に手を差し伸べ、相互扶助の仕組みを造り、キリストの愛を実践してきたように、この世を平和で安心な神の国に近づける努力が、そのまま福音の伝道であることを、賀川は身をもって教えてくれている。

追記 拙稿は、日本ウェスレー・メソジスト学会 第15回総会・研究会 2013年9月9日(月)、日本基督教団・銀座教会で口頭発表しました。また賀川豊彦学会で口頭発表し、書評、論文として『賀川学会論叢』などに掲載させていただいたものを修正加筆しました。

(共愛学園前橋国際大学 准教授)